

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 21 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22615008

研究課題名（和文） 消えてしまった地域伝統工芸品の再現・復活による地域振興

研究課題名（英文） Regional Promotion based on Restored Traditional Crafts

研究代表者：

鈴木 直人（SUZUKI NAOTO）

千葉大学・大学院工学研究科・教授

研究者番号：90568239

研究成果の概要（和文）：急速なグローバル化の中で、本研究は、その消滅した独自伝統工芸文化の復活、そして、それを活用した地域振興のありかたを日本のみならず、多くの発展途上にある国々に提示できた。特に、薩摩焼、小鹿田焼き、パラオ、インドネシアにおける調査は、伝統工芸品復活による地域振興のあり方をより明確にし、当該地域の人々のみならず、国際会議を通して、多くの学術・政策関係者はその大切さを再認識した。

研究成果の概要（英文）：Rapid globalization has given significant impacts on regional culture. The subject research has put forward a clear guideline for restoring the extinguished traditional crafts to be used for regional promotion. The results which stems mainly from the research on Satsuma and Onta pottery as well as Palauan traditional crafts and Indonesian batiks were shared not only by those involved in its restoration but also by scholars and policy makers through international conferences.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：時限

科研費の分科・細目：デザイン学

キーワード：復活伝統工芸品、地域振興

### 1. 研究開始当初の背景

近年、世界の政治・社会現象と深く係わりつつ世界規模での経済活動の新しい関係と共通の価値観・制度を築いていくグローバル化のプロセスは急速な進展を見せている。それは、私たちの日常生活に大きな変化を与えており、とりわけ文化面における影響は大きい。人々の行動様式や生活様式が変容しているのみでなく、多岐にわたる分野の経済活動にも大きな影響を及ぼしている。本来、個別文化はそれぞれの価値をもっており、その間に高低・優劣はないとされる。しかしな

がら、20世紀半ばから確立され始めたアメリカ文化の優位性は国民国家および地域における文化に優劣意識を芽生えさせた。多くの国々・地域の人々はその及ぼす影響に不安を抱き、将来における自分たちの文化の変容、消滅に対する危機感を持ち始めている。その意識はイスラム文化を継承してきたイスラム諸国において特に強い。これらの国々にとって、先進工業国日本の文化・伝統技術の継承における実績は驚愕するものである。その背後にある蓄積された知識を学び習得できる機会を得たいとの期待は大きい。本研究で取り

上げる「消えてしまった地域伝統工芸品の再現・復活による地域振興」は、その一助となるものである。

## 2. 研究の目的

本研究では「消えてしまった地域伝統工芸品の再現・復活による地域振興」を中心研究課題として取り上げ、成功事例などを精査する。これにより、今後の日本およびイスラム諸国の地域振興のひとつの指針形成に寄与するとともに、当該分野におけるイスラム諸国の大学との学術研究交流を促進することを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、まず、消滅した伝統工芸品の再現・復活に関する歴史的考察、産地での実態調査を選択された二ヶ所以上の産地で詳細に行う。具体的には、消滅した原因、復活に活用された資源（宝）の確認、かかわった地域の人たちと組織の参加の度合い、再現・復活を目指した地域の生活作りのためのデザインプロセスの検証、および将来の振興ビジョン作りを住民の方たちと共同で行う。その結果を、調査対象地域の住民と協議し住民主体により現実的に実施のための活動を始める。その結果はイスラム諸国会議機構（OIC）の下部機関であるイスラム文化・歴史・芸術研究機関（IRCICA-イスタンブールに本部を置く国際機関）が主催する国際会議で発表する。また、その結果を踏まえてIRCICA との協議に基づき、イスラム諸国から一カ国選択し、消滅した伝統工芸品のかつての産地にてその歴史的考察を行い、具体的な再現・復活振興に対する生活デザイン提案を行う。現地調査は博士前・後期課程、学部学生、研究代表者、研究連携者を中心に行う。最終結果は、国際会議あるいは、ワークショップを開催することにより内外に結果を公表する。年度ごとの具体的な研究方法は以下のとおり。

### （1）平成22年度：

文献調査による消滅の危機にある日本の伝統工芸品の現状把握、選択された日本及び海外の研究対象地それぞれ一ヶ所で現地調査・分析の実施、報告書の作成。

### （2）平成23年度：

さらに日本国内における追加現地調査研究の実施、報告書の作成。国際会議での発表。イスラム文化・歴史・芸術研究機関（IRCICA）の研究者との初年度・本年度の調査結果に関する協議に基づき、調査研究対象国をIRCICAのメンバー国から選択。IRCICAの推薦と協議により、選択された国における現地調査協力大学の決定。地域生活の中で、明らかに重要な役割を果たしていたが、すでに消滅した伝統工芸品の選択・リスト化。その概要（技術に関する歴史、原料、製造工程、過去の生活

の中での使用実態などを整理。

### （3）平成24年度：

「消滅した伝統工芸品のかつての産地」（選択されたイスラム圏の一ヶ国）において現地調査。調査結果を現地の関係者と協議するためのワークショップの現地での開催。現地調査協力大学の研究者が参加する日本での合同会議の開催。イスラム諸国の協力関係機関、大学への研究成果の配布。

## 4. 研究成果

### （1）調査・分析

#### 2010年度：

①消滅し復活した和傘の生活デザインにおける意味—九州中津、城島、山鹿の和傘の調査においては、既に和傘の復活に積極的に取り組み、まちおこし活動を始めた中津の



図1：和傘調査報告書

事例、また、地頭に保存会を結成し、地域の人々にその製作技術の伝承活動をしている城島和傘保存会の活動、さらに、和傘の制作作家を中心に山鹿の町おこしを模索しているグループの活動事例を中心に考察した。（図1参照）

②パラオ・ニワール州の生活文化—消えてしまった伝統工芸品の調査では、日常生活から消え行くパラオの工芸品が意味を運ばなくなった背景・影響を精査した。そしてその復活の現状分析を通して将来ビジョン

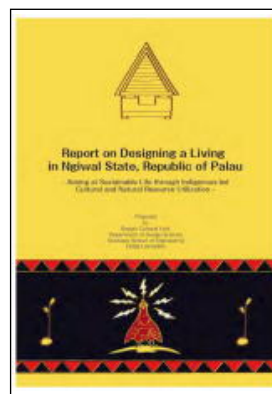


図2：パラオ調査報告書

の形成の方向性を見つけ出した。具体的には、パラオ国ニワール州において伝統工芸品調査に加えてそれらが使われた伝統食文化の調査も実施し伝統工芸品と

「食文化」の関わりに対しての考察を行った。さらに消えてしまった工芸文化・食文化を復活させるエコツ

ーリズムのあり方に対しての検討・提案を行った。（図2参照）

#### 2011年度：

③「生活に関わる薩摩焼産業—その振興策を中心として」調査は、江戸末期薩摩藩が中心となった薩摩焼の振興形態、また、明治時代の輸出振興策などの考察から、消え行

く伝統工芸品の復活・振興のあり方を浮き彫りにした。個別の産品としてはより民芸



図3：薩摩焼調査報告書

品に近い黒ものといわれる薩摩焼の特定された技術の消滅・衰退の経緯、そして復活・振興の実態を把握した。具体的には、佐太郎窯、荒木窯、沈寿官窯の詳細調査を実施した。消えて行った技術の復活では、自分達の生活のためにつくり、

使うことを通して、半農半窯の精神を大切に「薩摩焼」文化を守り、育てる薩摩焼産業に従事する人々の様態を考察した。そしてその復活・継承の効果的なアイデアを提供した。たとえば、「薩摩焼」の表札づくりはその一例である。(図3参照)

④小鹿田焼きの調査では1700年代半ばから「みだりに昔を崩さない」という小鹿田焼きに従事する陶工たちの陶器の制作にかかわる生活のあり方を、詳細にわたり考察した。それは「消えてしまった」ではなく「決して消える事のない伝統工芸技術」の実態を検証することであり、消えてしまった伝統工芸品と地域とのつながりを考察する上で興味深い結果となった。つまり、伝統民芸文化のあり方、その継承の要因を明らかにし、今日における伝統民芸文化の継承に基づく地域のあり方の一方向性を導出したものである。具体的には以下の7つの小鹿田焼における伝統民芸文化の要素を抽出し、この要素が互いに影響を及ぼし継承が維持されていることを明らかにした。1. 基本を重んじつつ現代に順応すること、2. 手仕事でものづくりすること、3. 家族構成員の多くが生産工程に携われること、4. 地域の陶工が協働できる機会が多いこと、5. 生活と陶芸の営みが一体化していること、6. 地域構成員のつながりがタテ・ヨコと包括的であること、7. 先代に学び小鹿田焼の流れの中で長い視点で見ること。さらに「生活」、「ものづくり」、「意識」のあり方の一方向性の指針とその関係性を導き出し、これを実現する為に、以下の4つを行っていくことを提案した。1. 既存の地域のつながりをよりタテ・ヨコへと活発的に包括的にしていくこと、2. 先代が行ってきたものづくりを理解し直すこと、3. 手間を惜しまず、手仕事による一つのモノづくりを、一生をかけて極め、人として成長すること、4. 地域の生活とものづくりの一体化を目指すこと。

以上は、多くの住民、陶工からのアンケート

ト回収やインタビューに裏付けられた結果である。

(2) 国際会議における調査・考察結果の発表

①2010年度、2011年度の調査結果の中心課題となるべき伝統工芸品の復活振興に関する内容と、千葉県いすみ市にて実施された「消えてしまった里山の竹工芸文化の復活」の



図4：IRCICA カタール国際会議



図5：伝統工芸文化継承のための交流促進小冊子

ワークショップの結果を2011年12月7-9日カタール国ドーハで(図4参照)、2012年2月19日~20日オマーン国マスカットでそれぞれ開催されたIRCICA主催の国際会議で発表した。当会議にはイスラム会議機構(OIC)のメンバー国のうち多くの中東諸国が参加した。前者の会議においては研究代表者の単独名で、また後者の会議においては連携研究者との共著で論文を発表し、それぞれの会議においては日本の経験を総括的にまとめた「伝統工芸品の振興における日本とイスラム諸国の協力・交流(原文英語-日本語訳)」と題する小冊子を作成して配布し、この分野における協力の可能性を提示した。(図5参照)

②2012年10月22日~26日愛知県足助町にて実施されたアジアの学生22名をデンソー社会貢献事業の一環で実施された「先人の知恵から学ぶ環境教育」や2013年1月7日~11日実施されたフィンランド・アルト大学とのワークショップで小鹿田焼きやパラオの



調査結果を反映する「消え行く伝統工芸品を使う先人の知恵」、「みだりに昔を崩さない」の理念を海外の学生に紹介し、それらが環境にやさしい生活文化、伝統工芸文化の継承の礎になっている事を紹介した。(図6参照)



図6：アルト大学との共同ワークショップの報告

(3) 初年度、次年度の調査結果を踏まえたイスラム国における「消滅した伝統工芸品のかつての産地」における生活作りデザインの方向性への考察

2011年11月そして2012年2月のIRCICA主催の国際会議にてIRCICAの研究者との打ち合わせの結果、インドネシアにて「伝統的バティックの復活・振興に基づく生活作りのデザイン」をバンドン工科大学と共同で実施することとなった。対象地域は中部ジャワとした。調査は2012年6月11日～18日インドネシア国中部ジャワ行われた。生活作りのデザイン要素としてまず、伝統的バティックの価値の再認識の重要性が確認された。具体的には、ジャワ島中部に位置するソロ・ジョグジャカルタの人びとの生活とバティックの関わりの中で培われてきた「伝統バティック文化」と呼べる生活文化の継承に対して、以下の2つの生活デザインの主要素が導出された：1. 制作工程にみられる伝統的バティックの価値、2. 色彩と文様にみられる伝統的バティックの価値。これらの考察は報告書にまとめら(図7参照)、その内容は2013年2月バンドン工科大学の研究者とともに地域の関係者にワークショップを開催して伝えられた。



図7：バティック報告書

前者に関する考察結果・提案としては、王族・貴族階級特有の価値観に基づく手間と時間をかけたバティックは、できあがった作品そのものだけではなく、製作に手間と時間をかけることに意味があったこと。つまりバテ

ィックは衣服としての機能的な意味合いだけでなく、その製作工程にかけられた手間と時間に価値があること、そしてバティック文化は「人と人とを結びつける役割」を担っていたことが浮き彫りとなった。例えば、バティック製作の技術は、家庭の中で母から娘へと世代を越えて引き継がれていたこと、長時間に渡るロウ置き作業は、数人の職人の間に自然と会話がうまれる事実からわかるように、工房でのバティック製作の場は、職人同士のコミュニケーションの場でもあることを強く意識する必要性を強調した。

後者に関する結論は、伝統的バティックで使われる自然染料は、種類や分量が地域や工房ごとに異なり、それが各々独特の色合いを生み出し、その土地の自然の色合いを反映し地域のアイデンティティともいえる伝統色となっていること、伝統的バティックを着用する人々は自然を身近に感じること、さらに、伝統的バティックの文様は、歴史と文化を伝える「生きた伝承」であり、様々な種類があり、そこに多様な意味が込められていることが再認識された。

さらに、上記ワークショップの結果も含めは2013年4月千葉大学においてバンドン工科大学の研究者とのあいだで会議を開催し、消えていく伝統的バティック文化の継承・観光資源としての活用などに関して本研究から得られた知見、及び、今後の研究課題が総括的に共有された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

ROLE OF DIET IN SUSTAINING THE FAMILY AND COMMUNITY TIES - Social Innovation Design Anchored on Traditional Dietary Culture in Ngiwal, Republic of Palau, Suzuki Naoto, Tachihara Saori, 2013 March JSSD

〔学会発表〕(計 3件)

海外：

(1) An Educational Program aiming at Restoration of a Traditional Playground and Bamboo Crafts and Toys for Children, IRCICA Doha International Congress on Traditional Craft Promotion, Dec. 2011 Suzuki Naoto, カタール国

(2) Traditional Crafts as a Regional Cultures and Assuring Sustainable Environment, IRCICA Muscat International Congress on Traditional Craft Promotion, Feb. 2012, Suzuki Naoto, Uesa Akira オマーン国

国内：

食文化に関わる生活デザインの今日的課題の抽出と分析ーバラオ共和国ニワール州の伝統的食文化の考察に基づいて、立原

さおり、58回日本デザイン学会研究発表、  
2011年  
〔その他〕

ホームページ等

<http://histl.ti.chiba-u.jp/news/satsuma%20report.pdf> (薩摩焼調査報告書)

<http://histl.ti.chiba-u.jp/news/report%20final.pdf> (インドネシアバティック文化復活報告書)

<http://histl.ti.chiba-u.jp/news/wagawa%20final%20report.pdf> (和傘調査報告書)

[http://histl.ti.chiba-u.jp/news/Palau\\_English1111.pdf](http://histl.ti.chiba-u.jp/news/Palau_English1111.pdf) (パラオ国にワール州生活文化調査報告書)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

鈴木 直人 (SUZUKI NAOTO)  
千葉大学・大学院工学研究科・教授  
研究者番号：90568239

### (2) 連携研究者

植田 憲 (UEDA AKIRA)  
千葉大学・大学院工学研究科・教授  
研究者番号：40344965

### (3) 連携研究者

宮崎 清 (MIYAZAKI KIYOSHI)  
千葉大学・名誉教授  
研究者番号：90009267